

マルバネクワガタ *Neolucanus championi* が飛翔しているのを見つけ、皆で走り回っていくつかネットインした。真っ昼間から筐の上をぶんぶん飛んでいるクワガタ虫なんて初めての経験である。

後日談だが、高桑氏の採集品を見た藤田宏氏が、小生の採集品も欲しい、と我が家まで取りに来て、しかしその帰りに酔っぱらって？電車の網棚に置き忘れたとか。結局鎌苅さんの標本が巻き上げら

れる事になったようだ。

閑話休題。高桑氏とは、その後「夢虫の会」の採集会で2～3度、2年前に台湾で一度一緒に過ごした程度だが、昼間から缶ビールを片手になんとも楽しそうに虫採りをする姿はもう見られなくなってしまった。ご冥福を祈るばかりである。

(三浦市)

高桑さん、さようなら

久保田正秀

「まだ開いてないよね」
「まあどこかありますよ、とりあえず出かけましょう」

お願いして委員になってもらった会議が早めに終わると、こんな感じで飲みに出かけるのが常だったが、平成28年3月4日は少し様子が違っていった。

会議が終わって私の席を訪ねてくれたのまではいつも通りだったが、

「今日は・・・、ちょっと飲めないんだ」と言いつつ、手のひらでおなかのあたりを円を描くように擦っていた。

「そう、残念。じゃ4月になったらまた飲みましょう」と言ったものの心の片隅で『ひょっとしたら高桑さん、胃がんでも見つかったのかな？』との思いが頭をかすめた。これが直接お会いした最後になってしまったのだが。

その1ヶ月半前の1月13日、高桑さん、新里さんと3人で居酒屋のテーブルを囲んだ。前年8月、妻を脳幹出血であつという間に失った私をいたわり、「女房を亡くした男はがっかり来て後を追ったりするから、十分に気をつけるんだよ」と励まし

てくれたのだが、まさかその高桑さんが7ヶ月後、同じ8月に死んでしまうなんて。

この時いつものばか話の中で、何気なく掴んだ高桑さんの腕が、やけに細く感じられてびびくりした。その記憶があったからこそ『胃がん？』という思いがかすめたのだが、まさかすい臓癌だったとは。

7月28日、奄美大島に出張中であつた私に勤務先から、しばらく連絡が付かなかつた高桑さんがどうやら入院していたらしい、との連絡があつた。早速高桑さんの携帯に電話すると「今、娘が鹿児島島に帰るところだから、少ししたら電話する」とのこと。私は携帯を握りしめて電話を待った。なぜなら、高桑さんの声があまりに力なかつたから。

10分ほどで電話が来た。「実はすい臓癌で、これから様々な治療を試みる。自分がやらなければならない仕事はやるけど、他の人で済むことは他の人に頼んで欲しい。病気のことは藤田さんと丸山さんくらいにしか言っていないので、できる限り黙っていて欲しい」

あまりに思いがけない、重たい話に思わず私は、「高桑さんが元気になるんだつたら奄美でコブヤハ



写真1. 華飲み会裏方の打ち上げで、ネズミ男のまねをする高桑さん。2009年3月11日。

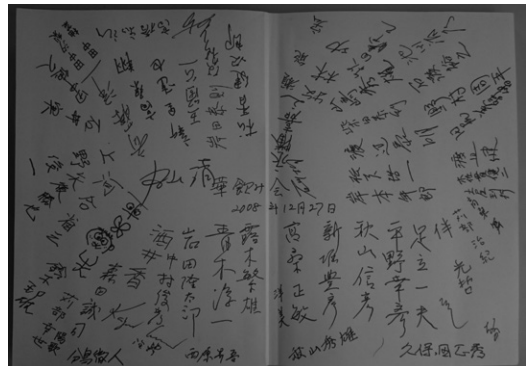


写真2. 『高桑正敏の解体虫書』の見返しに華飲み会に参加した皆さんのサインをいただいた。ご本人はじめ奥様や舞さん、翔君の名前もある。2008年12月27日。

ズだって採りますよ」と言った。それを聞いた高桑さんが笑いながら「コブは無理だけど、今ハナノミには一番良い時期だ。ハナノミ採ってこい」と返してきた声には張りが出ていた。虫のことに
なると思わず力が入るんだなあ。

奄美から帰った私は力のない高桑さんの声が頭から離れなかった。そんな中、元横綱千代の富士の訃報はショックだった。7月31日すい臓癌で逝去。どうか高桑さんにも、ご家族の耳には入りませんようにと祈るような気持ちだった。病気と闘おうとしている高桑さんには聞かせたくないニュースだった。

8月25日、旅先の私に、新里さんや勤務先から高桑さんの訃報がもたらされた。「こんなに早く?」「どうして?」という思いが次々に湧き上がる。

9月19日、8年前に高桑さんの還暦をお祝いしたあの会場でお別れの会が開かれた。会場は同じだが高桑さんは写真の中、そして遺品の中にしかない。藤田さんの話やその日配られた『月刊むし』の記事で詳細を知る。会場で奥様の洋美さん、舞

さん、翔君と話ができて良かった。私は高桑さんに手を合わせ、少し早めに会場を後にした。

高桑さんの周りにはいつもその人間的魅力に惹かれた方々がいた。それぞれの方に、その方だけの高桑さんの思い出があるのだと思う。私にも私だけの高桑さんがいる。高桑さんと40数年の思い出は私の心の中にある。そこにはもちろん先に逝った秋山黄洋もいるのだけれど。

高桑さんとの出会いやお付き合いは『高桑正敏の解体虫書』に書かせて頂いた。高桑さんは私のことを水戸昆虫研究会設立30周年記念の『るりぼし』30号に寄せてくれている。その中で高桑さんが書かれているが、最近のお付き合いは環境省や東京都のRDB作り、外来種対策の仕事などでの比重が高くなっていった。高桑さんを失ったことは、神奈川県や昆虫界にとどまらず、国の希少種保全施策の上でも大きな損失となったことは間違いない。

心よりご冥福をお祈りします。

((一財)自然環境研究センター理事)

高桑さん、採ったよ!

齊藤明子

2016年8月25日、高桑さんが急逝された。その日、届いたばかりの月刊むしの記事、高桑さんによる「セダカコブヤハズカミキリ探索記(4)」を読んだ直後に訃報メールが届いた。「うそでしょ?」と本気で目を疑った。

高桑さんが亡くなる2週間ほど前、山口県萩の近辺でセダカコブヤハズを採るにはどこへ行けば良いか、あるいは空白地帯のここへ行ってこい、でもよいので何か情報を下さい、というメールを高桑さんに送っていた。中国地方のセダカは難易度が高いということは高桑さんの何本かの記事を読んで予備知識があった。それならダメもとで空白地帯でトライしてみようか、などと思ってご病気の事は何も知らずに高桑さんに問い合わせしていたのである。いつもならすぐにご返事いただけるのに、今回はしばらく返信が無く、海外にでも採集に行かれているのかしら、と思っていた。返事が無いまま10日ほどして、体調でも崩して入院でもされていたら嫌だなあ、と思った矢先の訃報だった。

高桑さんには、1980年代から日本鞘翅目学会(旧日本甲虫学会)の運営などでお世話になった。そして、高桑さんは神奈川県博へ、さらに数年後私も千葉県博へ入り、カミキリ屋としてだけではなく、同じ博物館人として多くのことを教えていた

だいた。昆虫展で神奈川県博の標本をお借りする時もお世話になった。千葉県の行政関係でも無理を言って「千葉県希少生物及び外来生物に係るリスト作成委員」「千葉県博物館資料審査委員」をご歴任いただいた。また、外来種問題について各地の同好会などで普及啓蒙活動をやりたい、という高桑さんのお考えもあって、千葉県昆虫談話会にも入会して下さり、「自然史研究における外来種や偶産種の扱い方は?」というタイトルの公開講演会でお話しいただいた。高桑さんの説得力あるお話は確実に、聞いた人々の外来種に関する意識の高揚に繋がったと思っている。

これからも多くのことを教えていただかなければならなかったのに、こんなにも早く急逝されてしまったことが、とても残念でならない。甲虫界においても大切な方を失ってしまった。

9月上旬、高桑さんのアドバイス無しで中国地方のセダカコブヤハズに挑戦した。幸い、萩博物館のカミキリ屋椋木さんにご案内いただき、既知産地ではあるが5頭も採集することができた。天国の高桑さんはきっと、「アッコちゃん、えら〜い!」と誉めてくれているに違いない。

(千葉県立中央博物館)